

令和 8 年度秋田県総合政策審議会
第 2 回農林水産部会 議事要旨

1 日 時 令和 8 年 7 月 7 日（火） 午後 1 時 30 分～午後 3 時 30 分

2 場 所 オンライン開催

3 出席者

【農林水産部会委員】

三 浦 徳 也 （有限会社折林ファーム 取締役）

堀 井 直 子 （株式会社グリーンフォレスト仁賀保 専務取締役）

佐 藤 亘 （秋田県漁業士会 青年漁業士）

【県】

飯澤 主貴 農林水産部次長 ほかに関係課室長等

4 議事要旨

●三浦部会長

審議内容は、議事録としてホームページに掲載されるが、委員名は特に秘匿する必要は無いと考え公開としたい。委員の皆様には御理解をお願いしたい。

それでは、次第に従い進めていく。はじめに、議事（1）提言の取りまとめにむけてについて、事務局から説明願いたい。

□小野寺農林政策課長

～ 資料 1 により説明 ～

●三浦部会長

次に、議事（2）第 1 回農林水産部会での論点を踏まえた意見交換を実施したい。資料に基づいて各委員からの発言をお願いしたい。

【施策 1 日本の食を支える農業を実現する】

[担い手の安定確保に当たっての課題と解決にむけた取組について]

○堀井委員

農林漁業に共通する課題として、秋田県では冬期の仕事の安定性や生産性の確保が難しい点が挙げられる。新規採用者を増やしたくても、年間を通じた仕事があれば雇用につながらない。冬期の仕事の確保が一番重要と考える。

○佐藤委員

漁業も同様で、日本海側は冬に海に出られない日が多い。冬の間加工し販売できる仕組みを確立させることが経営の安定につながる。実際、周りの農家の友人も冬は何もしていない人が多い。

●三浦部会長

私の法人では社員10名（外国人2名含む）を通年雇用している。地域の他の農家は、冬場に除雪、肥料散布、比内地鶏の管理、上水道の管理などを組み合わせて対応している。人手と仕事は「鶏と卵」の関係にあると思っている。当地域では特定技能外国人を支援する登録支援機関の設立を考えているところであり、人口減少が進む中、外部からの労働力を確保し、定住してもらう取組が重要なのではないかと考えている。

□小野寺農林政策課長

人口が減少する中、最も必要なのは「農林水産業で稼げる」こと。地域に仕事があれば人が残り、コミュニティも維持され、県の最大課題である人口減少対策にもつながるものと考えている。

[米の生産拡大に当たっての課題と解決に向けた取組について]

○堀井委員

近所の農家を見ると、去年は米価の上昇もあり活気があったが、今年に入り米の値段が安くなってきている。消費者としてはありがたいが、労働力をかけている農家は大変だと思う。今後は個人ではなく集団での大規模化が進んでいくものと考えている。

○佐藤委員

米の価格が下がっており、農家の友人も困惑している。需要と供給のバランスをうまく取る流通が重要と考える。

○三浦部会長

需要の獲得が重要である。私の農業法人では、作付け前に実需者と数量や価格を調整・決定している（契約栽培）。秋田のお米を必要としてくれる実需者がどれくらいいるのかを、県や市が主体となってヒアリングやマーケティングを行い、具体的な総量を出してみることが必要なのではないかと考えている。

安易な輸出は、海外の安い米との価格競争や品質管理の面から難しいものと思う。

[園芸品目や秋田牛等の生産拡大に当たっての課題と解決に向けた取組について]

○堀井委員

ブランド化を進め、販路拡大につなげるマーケティングの取組が必要と考える。秋田牛や由利牛は非常に美味しいが、他県と比較してパッケージや売り方、アピールの柔軟性が

負けていると感じる。目の引くようなパッケージ作りが必要である。

○佐藤委員

トマトやきゅうりなどの園芸品目は打ち出しが弱い。「あきたこまち」のようにしっかりとブランディングし、ターゲットを絞ったアピールにより、比内地鶏や秋田牛に並ぶ品目を作れたら良いのではないかな。

●三浦部会長

秋田のえだまめやトマトは首都圏等での評価が高いが、県内の人（特に子供たち）が意外と知らない。外貨を稼ぐための首都圏発信と同時に、県内での食育や地産地消を進める複合的な取組が必要と考える。生産拡大には安定的な担い手が不可欠なため、施策1の担い手確保の取組と結びつけて推進すべき。

また、他県のように県や市のSNSで旬の野菜や美味しい食べ方、お店の情報をQRコード等で発信・周知する仕組みがあると良い。

比内地鶏については、雛の供給元、生産者（飼育）、処理場（屠殺・加工）の連携が不安定だと生産拡大できない。前回、ブランド認証協議会と検討を進めるとの話があったが、どのように進んでいるのか時系列を示してほしい。来年の生産計画に関わるため、会議の場でなくても農家に対し情報をいただきたい。

【輸出の拡大に当たっての課題と解決手法について】

○堀井委員

ブランド化を進めた上で、積極的に売り込んでいくしかないのではないかな。

○佐藤委員

輸出拡大には量が必要なため、人材確保やスマート農業による生産性の向上が不可欠なのではないかな。ブランディングを含め、全ての施策が関わってくる。

●三浦部会長

輸出は価格差や品質管理、宗教的問題などにより、単独での取組は非常に難しい。輸出特化企業やJA（全農インターナショナル等）との連携が重要であることから、県内で輸出に取り組む大手企業の情報がもっと身近にあると良い。

【施策2 森の恵みを未来へつなぐ林業・木材産業を実現する】

【林業就業者の安定確保に当たっての課題と解決に向けた取組について】

○堀井委員

林業界に入って30年になるが、人材不足の課題は変わらない。新卒（高卒等）の採用をしても、3年で6割しか残らないなど定着率が低い。ここでも冬期の仕事の確保が重要で

あり、例えば当地域（由利本荘地域）では冬場に松食い虫駆除のための伐採を行っているが、5年後にはその事業が相当数減少するといった話も聞いている。

今から対策を立てていく必要があり、例えば、公共事業などの工期を夏から冬へスライドさせることも含め検討が必要なのではないか。

温暖化の影響により夏場は暑すぎて一人当たりの植栽や下刈りの仕事量が下がるため、工期を長く（10月頃等まで）取り、冬に向けてずらしてもらえると冬期の仕事確保と暑さ対策の両面で良いものとする。

○佐藤委員

こうしたことは女性の活躍面などにおいてもアピールできるのではないか。

○堀井委員

植栽や下刈りは木が小さいうちの草刈りであり、炎天下の人力作業なのでやりたがらない。しかし、植えたり育てたりする作業は繊細で、腰への負担が少ないなど、女性に向いている仕事もある。当社では専門的にやっているが、5～6人しかおらず年間100～130ヘクタールが限界となっている。人手がいないと植える量も限られ、将来的に伐採できる木材も無くなるということになる。

●三浦部会長

即戦力となる外国人労働者の活用も重要ではないか。日本語が読めない書けないため、チェンソーなどの資格取得（漢字の試験など）の壁があるとすれば、森林組合や県がサポートする仕組みを作ってはどうか。就業者数を圧倒的に増やす要因にもなる。

[低コスト・省力造林技術の普及・締約に当たっての課題と解決に向けた取組]

○堀井委員

機械化やエリートツリーの活用による苗木供給が進んでいる。穴掘り機が電動化し、女性でも使いやすくなった。ただし、現場（傾斜30度など）で本当に機械が使えるかという実用性の課題はある。

○佐藤委員

見回りや苗木の運搬にドローンを使えば省力化できるのではないか。

○堀井委員

苗木の運搬には既にドローンを使っている（中継地点が必要で2人体制）。運搬専門業者に頼むと1日40万円ほどかかり、費用が非常に高い点が課題となっている。

[県産材の利用・販路拡大に当たっての課題と解決に向けた取組]

○堀井委員

住宅着工率が下がる中で、木材の産出額の目標（+37億円）を大きく伸ばしているが、その理由は何か。バイオマス用燃料チップや、秋田で盛んなしいたけなどの栽培キノコ類の産出額を伸ばしていくということなのか。

□永井参事（兼）林業木材産業課長

住宅着工戸数は減少傾向にあるが、昨今の円安やウクライナ情勢による影響で外材が入りにくくなり、国産材への置き換えが進んでいる（国産材使用割合：R 2年の48%からR 5年には54%へ上昇）。また、県内に進出した大型工場で国産の構造用集成材等を製造し、県外へ出荷する体制が整ったため、産出額の目標を増として設定している。

●三浦部会長

外材から国産材への置き換えが進むという見込みは理解できた。あとは、販路拡大に向けたPRや、県産材をより使ってもらうための横のつながり、発信力が重要となってくるのではないかな。

【施策3 環境変化に対応した新たな水産業を実現する】

〔蓄養殖の推進に当たっての課題と解決に向けた取組〕

○堀井委員

水産業においても年間を通した仕事の確保が重要ではないか。温暖化で水質が変わりハタハタも減少する中、秋田ならではの養殖の推進を期待する。

○佐藤委員

現在、牡蠣の養殖に取り組んでおり、従来の「垂下式」ではなく、秋田が北限となる「バスケット式」の岩牡蠣養殖を行っている。通常、1個1個、殻を剥いて加工・出荷するが、バスケット式は殻付きのまま生で食べられるため、1粒1～3円の稚貝が200円など高値で売れ、非常に付加価値が高い。

牡蠣の高水温によるへい死を防ぐため、夏場は水深の深い船川や北浦などの沖合に沈めるサイクルを試している。これがマニュアル化できれば増産も可能となる。また、水田でのエビ養殖や、山水を利用したニジマス・サーモンなどの「陸上養殖」も検討中である。力仕事が多く、冬場も港内などの穏やかな場所で回収・出荷できるため、女性も働くことができ、冬期間の安定収入につながるのではないかと考えている。

●三浦部会長

農林漁業を組み合わせ、冬は水産養殖、夏はそれぞれの専門である農業・林業に出るような、地域一体となった複合的な働き方のモデルが描ければ非常に魅力的であり、農村漁村の活性化につながるのではないかな。

【施策4 活力あふれる明るい農山漁村を実現する】

○堀井委員

若いお父さん・お母さんは忙しいため、祖父母と孫をターゲットにしたイベント等を通じて、農林漁業の楽しさやワクワク感を次の世代に伝える視点が必要と考える。

○佐藤委員

山水を利用したサーモンの「管理釣り場」ビジネスを提案したい。青森県平川市の事例では、サーモンそのものも関東方面からの需要が非常に高く、トン単位での注文がある。管理釣り場は、冬でも雪の中で釣りができ、餌やりだけで力仕事も少ない。水田のエビ、山のサーモンなど、冬にやることがあって楽しいビジネスを進めていってはどうか。

●三浦部会長

単独の産業ではなく、農業・林業・水産業が地域で組み合わさることが、これからの「オンリーワンビジネス」や「農村RMO」の形成につながっていく。

□大山農山村振興課チームリーダー

県では農山漁村活性化に係る人材育成研修「AKITARISE」を毎年開催しており、年間約100名が受講している。

最終的に約15名がビジネスプランを発表し、この5年間で約60名が構想を立て、その2/3が実際に起業・事業化している。

●三浦部会長

「AKITARISE」を受講するようなやる気のある起業家に対し、既存の一次事業者が土地やノウハウを農・林・水の3者で連携して提供・サポートする仕組みがあれば、継続的な事業化と産出額の増加につながるのではないか。

□大山農山村振興課チームリーダー

非常に良い提案であり、今後の参考にしたい。

□飯澤農林水産部次長

食育に代表される長期的な視点での子供への教育、外国人労働者へ寄り添った視点などについて、我々としても再認識した。様々な御意見をいただき感謝申し上げます。次回は部会としての提言をまとめる必要がある。当初はオンラインを予定していたが、より細かな議論と詳細な説明のため、次回は対面での開催としたい。

□事務局（農林政策課）

次回（第3回）は9月開催とし、新しい様式に落とし込んだ提言の素案を早期に皆様へ提示したい。本日の議論について、追加の意見等があれば随時事務局へお寄せいただきたい。

以上で閉会とする。

－ 議事終了 －